

この学術の名は「日本語学」でもなく

石 井 久 雄

私たち、と言ふことによつてだれを指さうとしてゐるか、私自身にも明らかでない。しかし、なほ問ふこととする。私たちはなにをしてゐるか、しようとしてゐるか。これに答へようとするこゝによつて、私たちの学術の名を考へることを試みたい。

私たちは言語学の一翼を担ひ、日本語を明らかにすることによつて言語を明らかにしようとしてゐる。——さういつたところが模範解答であらうと思ふ。この解答にとつては学術の名は「日本語学」であり、「国語学」は似つかはしくない。

違ふと言ふ人もあるであらう。日本語を明らかにしようとしてゐる、それはさうであるが、言語一般に向かふつもりはない、といふこともあるであらう。そのやうなときに、「日本語学」や「国語学」の名はふさはしいか。

*

日本語を明らかにすることによつて言語を明らかにする。模範解答にさう言つたが、現にさうなのであるか。

実情は、他の言語について知られたところを適用して日本語を眺めてみる、といふ行きかたも多いのではなからうか。現代日本語の

文法や談話やを扱ふに当たつては、特にアメリカで行はれてゐる最新の研究を踏まへることが当然になつてゐる。最新の研究を踏まへることは当然であるとしても、だれかがなにか「……理論」と一言すること、日本語もさやうであると追ひ駆け回してゐる、さう落ち着きなく見えるところがある。

アメリカで行はれて日本に紹介される研究は、おほかた現代英語を対象としてゐる。それは、華ばなくとも、英語学であると言つてよいはずであり、それに追従することを旨とする限りでは、日本語研究も英語学の一領域を占めるに過ぎないと言つてよい。つまり、日本語について研究しようと、名は「英語学」でよい。

もつとも、アメリカの英語学が、携はつてゐる研究者によつて、そもそも英語学と思はれてゐるかいなか。単に言語学に携はつてゐるとしか、思はれてゐないのではなからうか。アメリカを語ることは世界を語ることであるといつた自負が、言語についてののみならず、たとへば思想・科学についても政治・経済についても、アメリカにはある。その意味では、みぎの日本語研究も、ためらふことなく「言語学」であると言つてゐてよい。

日本語を通して言語を明らかにするといふのならば、日本語につ

いて明らかにしたことを諸言語に当て嵌めてゆく、といった気概もありうる。欧米の思想を伝えるばかりで学を成り立たせるといふ、この国で百年を過ぎる風を、この気宇は乗り越えなければならぬ。

欧米の思想が現代世界を導いてゐることはもとより否定すべくもなく、それを乗り越えるとは、相当の解釈を加へて継承するといふことである。日本語の研究によつて解釈を加へて言語学を継承したところには、一言語学派が形成されるといつたこともあるかもしれない。さういふ學術の名には、「日本語学派言語学」などもありうるであらう。

*

アメリカの動向を見たりしない行きかたもある。歴史上の作品を記述したり、方言を記述したりすることを目標とするやうな研究は、おほかたそのやうなものであると思はれる。そこには、日本語を明らかにするといふ目標はあるが、しかし、それを通して言語を明らかにしようといふ目標があるかいなか。それがまた一つの実情ではある。

ただし、私は、記述そのことを、あるいは記述に止まることを、悪いことであるとは聊かも考へてゐない。確実な観察による記述は、その解釈などには遙かに優ると考へてゐる。理論は新たに生み出されるであらう。しかし、前の理論による記述であつて、必要な変更を加へても新たな理論のものに翻訳することができない、そのやうに卓絶した新たな理論といふものはあまり出ないであらう。記述は生き残ることができ、むしろ、新たな理論を生み出す基礎が、確実な記述でありうる。

さうではあつても、日本語を明らかにする向かうに、なにを見ようとするか。かりに今は禁欲的に日本語に止まつてゐるとしても、いづれなにかが見えてくることがあるかもしれない。なにが見えてくるかといふ問ひは、初めの問ひの別の形である。

初めの模範解答は言語を意識してゐる。日本語は言語の一つであるから、さう意識されるのは当然であるが、また、日本のいはば文化の一つであるから、おのづと日本を見せることもあるであらう。すなはち、日本語を明らかにすることによつて、積極的に意識して日本を明らかにしようといふ立場もあつてよい。「日本文学」の一領域を「日本語学」が占めることになる。

「国語学」を「国学」が生み出したことを想ひ起こさう。「国」は「漢」への対比であり、「漢」には「和」が対比されてもよかつた。「和」は「洋」に對比されてもよい。「国語学」の名に代へて、可能性として「和語学」もある。「和」が「やまと」であることを顧みるならば、「やまと語学」もある。「国」が国家の意味を担ひ過ぎてゐる現状が、「国語学」の名の問題である。

国家の意味を「国」が担つてゐるならば、「国語学」は国家の言語の学つまり公用語学でなければならず、その国家をただちに日本に特定することは無理である。「日本国語学」は、日本のなかの諸言語および公用語についての言語計画を扱ふことになる。

*

言語を明らかにしようとするにせよ、日本を明らかにしようとするにせよ、私たちは差し当たり日本語を明らかにしようとしてゐる。その限りでも、私たちが携はつてゐる學術の名は、「国語学」である。

か「日本語学」であるか。あるいはその他の名であるか。一方に決めてからうとしても、伝統になじんで抵抗感があるものもあり、論理的にをかしいこともある。

たとへば「万葉集の国語学的研究」を考へることはできても、「万葉集の日本語学的研究」と言ふのには抵抗がある。「日本語学」がすでにある種の色彩を帯びてしまつてゐるからであらう。「国」をも「日本」をも外した「語学的研究」あたりは、抵抗感がないかと思はれる。

また、海外でなされる日本語研究を「国語学」と言ふのは奇異である。「国」が「わが」日本国を意味するからであらう。この問題は、日本の研究を含めても、「日本語学」で解消されるやうである。

ただし、第一言語の研究と第二言語の研究とは、異なるものであるやうに思ふ。第一言語いはゆる母語は、人がそのなかで育ち、直観が効く言語である。直観が効くとは、現に使つてゐる当代のものについてばかりを言ふのではない。その言語の昔のものについても勤が働くのであり、そのことをも言つてゐる。さうなるのは、歴史を担つた文化のなかで育ち、その文化の一面として言語を獲得し使用するからであらう。第一言語の後に獲得する第二言語は、直観が効かず、むしろ第一言語からの干渉を生ずる。この直観の違いは研究を左右すると思ふが、対応する名を知らない。

*

かうして、私は、私たちが携はつてゐる学術の名を定めることができない。

私一個の気分を記すならば、「国語学」が担ふ国家の観念は鬱陶し

く、「日本語学」が帯びるアメリカ言語学の色彩はなじめず、「言語学」に想像される諸言語への通暁（このことについては触れなかつた）は無縁であり、「和語学・やまと語学」「日本語第一言語学」などは気恥づかしく、……。

強いて選ぶとすると、「国語学」を採つてしまひさうである。若いころは「日本語学」がよいと考へたが、学び始めの専攻の名が国語学であつたためか、馬齢を重ねて故郷に路を辿る想ひである。抽象的構造は具象的歴史が啓示するといふ信念をもつて歴史に甘え、国語学ないし日本学を向きながらも「日本語学」とは言ひづらくなつてもゐる。しかも、やや狭くは、「学」を添へずに「日本語史・日本語表現史」を称し、英語では日本学に携はつてゐるかのように *philological Japanology* と嘯いてゐる。

このやうな眩きは、初めの私「たち」に最も余分であらう。研究の対象の名を問ふこともしなかつた。多罪。

——武蔵大学教授——